

# 経済学と聖書(3)

2020年5月22日(金)

関西学院大学経済学部

春学期チャペル

担当：井口 泰

Auf, auf mein Herz, mit Freuden  
詞: Paul Gerhardt, 1607-1676AUF, AUF, MEIN HERZ  
曲: Johann Crüger, 1598-1669

1 よろこびに いるわがこころこころろよ。  
2 ほまえて きたのけのいあえくわがこころこころろよ。  
3 ままこよに とよみけのいあえくわがこころこころろよ。  
4 ままこよに とよみけのいあえくわがこころこころろよ。  
5 ままこよに とよみけのいあえくわがこころこころろよ。

か な し み は さ り ひ は か が や く。  
い な ま し そ い さ り は う は か が や く。  
み ま ち こ そ あ イ エ ス ー り は う は か が や く。  
わ れ の ち ら ひ の ふ た かん す り は う は か が や く。  
い の の ち ら ひ の ふ た かん す り は う は か が や く。

し う り の 主 は 死 ぬ べ き 身 を  
し う り の 主 は 死 ぬ べ き 身 を  
み 子 主 イ エ ス は 全 き 愛 で  
身 を さ さ げ て 勝 利 さ れ た。

か み の の く に へ み ち ー び から ー れ る。  
死 身 を の な さ れ る へ を た ち ー き ら ー れ た。  
お そ せ ざ れ る 死 に て も し ゃ ぶ れ ー ら さ れ ー た。  
か み の の く に へ を た ち ー き ら ー れ た。

- 1 喜び祝え、わが心よ。  
悲しみは去り、陽は輝く。  
勝利の主は 死ぬべき身を  
神の国へ 導かれる。
- 2 ほえたける悪、誇る敵に  
今こそイエスは 打ち勝たれた。  
勝利の主は 栄えを受け、  
死のなわめを 断ち切られた。
- 3 まことの平和 与えられて、  
満ちてあふれる この喜び。  
み子主イエスは 全き愛で  
身をささげて 勝利された。

- 4 主はよみがえり 先立たれる。  
われらひたすら 従い行こう。  
世の悩みも 人の罪も  
恐れも死も 破られた主。

- 5 「共に十字架を になう者に  
いのちの冠 授けられる」。  
よみがえりの 主のことばは  
神の国で われらを待つ。

アーメン。

### 経済学と聖書(3) 「健康と貧困」(5月22日)

「ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたいくに遊び暮らしていた。その金持ちの門前には、ラザロというできものだらけの貧しい人が寝ていた。彼は、金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。…しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによって、アブラハムの懷に連れていかれた。金持ちも死んで葬られた。金持ちが、よみで苦しみながら目をあげると、遠くにアブラハムと、その懷にいるラザロが見えた。…アブラハムは言った。『子よ、思い出しなさい。お前は生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、お前は苦しみもだえている。…そればかりか、私たちとお前たちの間には大きな淵がある。』(ルカ16:19-25、新改訳聖書) 讚美歌第二編323 作詞Paul Gerhardt, 作曲 Johan Crüger)

ADB(アジア開発銀行)は、新型コロナウイルスのパンデミック(世界的感染)が6ヶ月間で終息した場合でも、世界のGDP(2020年)は9.8%減少すると予想しています。この間、アジアで1億7000万人の雇用が失われ、所得水準の2割減少に伴い、絶対貧困層が8億人から12億人と増加に転じるとみられます。例えば、インドの都市では、「ロックダウン」が延長され、毎日食料の配給じゃ行列ができています。公共交通が停止し、徒歩で農村に戻ろうとする人々が行倒れる事態になっています。

日本では、昨日、首都圏と北海道を除き「緊急事態宣言」が解除されましたが、4月以降、事業継続できない商店・企業が増加し、雇止めが多発し、事態は深刻化しています。感染防止及び医療活動の維持と、経済社会活動をどう両立させるかが、緊急課題となっています。



経済学は、伝統的に、貧困というものを、所得水準という尺度だけで測っていました。しかし、アマルティア・セン教授は、「潜在能力」欠如の視点から貧困や経済援助のパラダイムを転換したのです。また、昨年ノーベル経済学賞を授与されたバナジー・デユプロの2人も、環境衛生や生活習慣の改善による健康の改善が、「貧困の罫」脱出に不可欠であることを実証してくれました。

感染への不安と外出の自粛が続くなか、私たちは、緊張したまま、行動の自由度を失い、次第に無力感に支配されます。幸い、ライフラインは保たれ、食べるものに事欠くわけではありません。運動不足は、私たちの身体の抵抗力を奪い、リスクに対し、弱くなります。知らないうちに、私たちも、健康を損ね、弱くなりつつあるように思います。

日本でも、ようやく感染拡大が鎮静化する段階を迎えていますが、感染リスクが消滅した訳ではありません。前と同じ生活・就労のパターンに戻り、前と同じ規模で人が移動することは、もはやできないのではないのでしょうか。

こうしたなかで、感染防止のため、「社会的距離」(social distancing)が推奨されています。これは実は残酷な言葉ではありませんか。感染しないために距離をとることが、まるで社会からの排除になるように聞こえるからです。感染した場合には、さらに、隔離(isolation)という厳しい措置が取られます。それによって、家族から分断され、友人とも会うこともできなくなるのです。そういう事態を想像するだけで、私は、大きな恐怖を感じてしまいます。

聖書にも、何気なく書かれているけれど、思わずぞっとしてしまうエピソードがいくつもあります。ただし、本日のルカによる福音書の箇所は、イエス様のたとえ話です。全身できものに覆われたラザロは、ヨハネによる福音書に出てくるマリア・マルタの兄弟のラザロ(イエス様が生き返らせた人です)と名前は同じです。しかし実在の人物かどうかわかりません。これに対し、金持ちは、自分は病気や貧困とは無縁の人で、ラザロに対し、何の思いやりもなく、一切支援もしなかったように見えます。

私はこの金持ちのなかに、病人に対する強い差別の心を感じぞっとします。アパルトヘイトに似た強いものかもしれません。もしかしたら、この金持ちは、自分の幸福以外に関心がないというより、他人のために行動する勇気がなかったのかもしれません。

病気の人を看護することの難しさは、私も体験から知っています。苦しんでいるひとを、どうしたら楽にしてあげられるかわからないので、悩んでしまうのです。それでも声をかけ、近くにいて病気の人を心を支えることで、本人が回復する力を取り戻してくれることを願うから看護できるのです。

パンデミックの最中にある私たちは、感染していなくても、既に、健康を損ねつつあるのかもしれません。健康をそこね、自分たちも貧困の淵にたっていることを認識すべきです。必要なのは、感染した人への差別でなく、他者への共感です。

私たちは、しばしば、あの金持ちのように、健康そうにふるまっています。しかし、私たちは、皆ラザロのようにみえてきます。自分も、健康を失い貧しくなったとの自覚が、私たちを結び付けるのかもしれません。そこに神様が働いてくださって、前に進む力を与えてくださるように祈っています。